

資料

医療技術系学生の死に対する恐怖のとりえ方について

— 看護学専攻学生と放射線技術科学専攻学生の比較 —

關 戸 啓 子^{*1}

はじめに

医療従事者を目指す学生を対象に、看護教員が「人間関係論」の授業を担当している。これまで授業時間数の関係で、学生の身近な家族や友人関係からはじめて、患者（外来受診時の患者を設定）や同じ医療従事者同士の人間関係についてとりあげ、講義とロールプレイングを組み合わせた授業を実施してきた。本授業の時間数が新しいカリキュラムに切り替わり増えることから、死を迎えようとしている患者や家族、遺族に対する人間関係についても授業に取り入れる予定である。しかし、本講義の主な履修学生は、看護学専攻と放射線技術科学専攻の1年次の学生である。入学間もない学生で、さらに専攻も違うことから、授業の基礎資料として、学生が死をどのようにとらえているのか知りたいと考えた。看護教育では、看護学生は死のみとりに関わることから、看護学生が死をどのようにとらえているのか調査した研究は、これまでに多くなされてきた。しかし、そのほとんどは学生の死のイメージに関する研究¹⁻¹⁰⁾である。死を迎えようとしている患者と援助者の人間関係においては、まず患者の心理を理解しようとする必要がある¹¹⁾である。患者は死への恐怖を強く持っている。なぜ人は死を恐れ、避けようとするのかについて、アルフォンス・デーケン¹²⁾は死への恐怖を9つにわけて説明している。「人間関係論」では患者を理解するために、人が死を恐れる理由を討論することからはじめたいと考えた。そこで、授業に資することを目的に、今回はこの9つの死への恐怖を質問項目として、学生自身は死の恐怖をどのようにとらえているのかを調査した。

研究方法

調査は、新しいカリキュラムにかわる2年前である2004年に実施した。「人間関係論」の全ての授業終

了後、受講していた看護学専攻1年次の学生と、放射線技術科学専攻1年次の学生を対象に調査を行った。調査用紙を配付し、研究の趣旨、参加は自由であり成績には影響しないこと、無記名で内容は統計的に処理されること、結果は新カリキュラムの授業に生かすこと、学会・学会誌等で発表することを口頭で説明した。その後、協力に合意した学生は提出用の箱に調査用紙を入れるように依頼した。

「死への恐怖」は、アルフォンス・デーケン¹²⁾が述べている9タイプの恐怖を使用し、恐怖が「ある」「ややある」「どちらともいえない」「あまりない」「ない」の5段階で回答を求めた。質問の内容が「死への恐怖」であるため、「ある」「ない」だけでは回答しにくいと考えて、5選択肢とした。また、統計処理の便宜上、「ある」に5点、「ややある」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまりない」に2点、「ない」に1点を付けて計算した。

結 果

調査用紙は、看護学専攻学生68人に配付し、56人（回収率82.4%）から提出があった。有効回答率は100%であった。放射線技術科学専攻学生35人に配付し、22人（回収率62.9%）から提出があった。こちらも、有効回答率は100%であった。

設問ごとに、平均点を示したものが図1である。ほとんどの項目で、看護学専攻の学生の方が、放射線技術科学専攻の学生よりも、より死への恐怖を感じているという結果であった。「未知なるものを前にしての不安」では、有意差が認められた。看護学専攻の学生が最も恐れていたのは、「家族や社会の負担になることへの恐れ」であり、放射線技術科学専攻の学生が最も恐れていたのは「苦痛への恐怖」であった。逆に最も恐怖が少ない項目は、両専攻学生ともに「死後の審判や罪に対する不安」であった。学生の回答を因子分析（主因子法、バリマックス

*1 徳島大学 医学部 保健学科

(連絡先) 関戸啓子 〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15 徳島大学

E-Mail: sekido@medsci.tokushima-u.ac.jp

回転)した結果は、表1に示すとおりで、3因子が抽出された。第1因子は、終末期になって死がおとずれるまでの恐怖と考えられ、「死を迎える直前の過程に対する恐怖」と解釈した。第2因子は、現在の状態で自分が消えてしまうという恐怖だと考え、「人生が途絶することの恐怖」と解釈した。第3因

子は、死や死後の様子がわからないことに対する恐怖と考えて、「死や死後の世界が未知である恐怖」と解釈した。

因子別に、因子得点の平均値を学生の専攻別に比較した結果が、表2である。第1因子・第2因子ともに専攻の違いによる有意差はなかったが、看護学

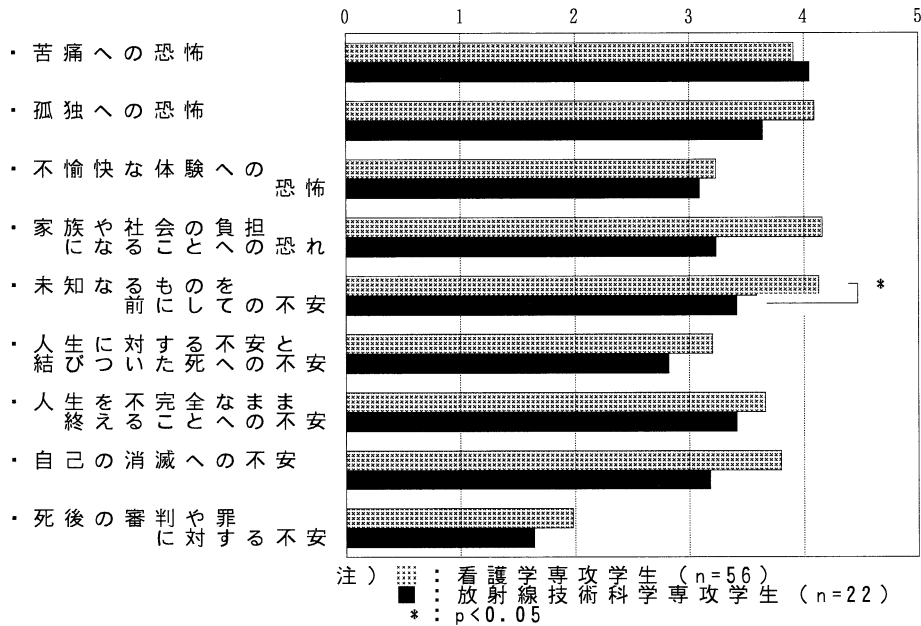


図1 「死への恐怖」得点平均値

表1 死への恐怖に対する因子分析結果

死への恐怖	第1因子	第2因子	第3因子	因子名
・ 不愉快な体験への恐怖	0.756	-0.013	-0.041	死を迎える直前の過程に対する恐怖
・ 苦痛への恐怖	0.573	0.204	0.251	
・ 人生に対する不安と結びついた死への不安	0.437	0.133	0.403	
・ 孤独への恐怖	0.393	0.099	0.238	
・ 家族や社会の負担になることへの恐れ	0.302	-0.204	0.101	
・ 人生を不完全なまま終えることへの不安	0.075	0.639	0.056	人生が途絶することの恐怖
・ 自己の消滅への不安	0.042	0.634	0.241	
・ 未知なるものを前にしての不安	0.023	0.197	0.652	死や死後の世界が未知である恐怖
・ 死後の審判や罪に対する不安	0.187	0.040	0.217	
因子の寄与率 (%)	15.33	10.69	9.19	
累積寄与率 (%)	15.33	26.02	35.21	

表2 因子得点の平均値の比較

因子	学生の専攻	因子得点の平均値
第1因子	看護学専攻学生 (n=56)	0.031 ± 0.771
	放射線技術科学専攻学生 (n=22)	-0.078 ± 0.960
第2因子	看護学専攻学生 (n=56)	0.060 ± 0.715
	放射線技術科学専攻学生 (n=22)	-0.152 ± 0.826
第3因子	看護学専攻学生 (n=56)	0.124 ± 0.618
	放射線技術科学専攻学生 (n=22)	-0.316 ± 0.816

n. s. □ p < 0.05 □

専攻の学生の方がより死を怖いものとしてとらえている傾向があった。第3因子は、看護学専攻と放射線技術科学専攻の学生間で有意差があり、看護学生の方が「死や死後の世界が未知である恐怖」を強く感じているという結果であった。

考 察

死への恐怖は、「苦痛への恐怖」以外全て看護学専攻の学生の方がより恐怖であるとしてとらえていた。その中でも、「家族や社会の負担になることへの恐れ」が最も強いことは、若い学生の回答としては意外であるといえよう。自分自身の苦痛や恐怖よりも、周囲への負担を優先に考えていた。これは、将来直接患者の援助を行うことが多い看護職を志向する学生の特徴なのかも知れない。今後、医療従事者を目指している学生以外との比較等から、その特徴を明らかにする必要がある。放射線技術科学専攻の学生は、「苦痛への恐怖」「孤独への恐怖」など直接自分が体験する辛さをより怖いものとしてあげている。「死後の審判や罪に対する不安」に対する得点が低いことから、現実的な考え方が強いと言えるかも知れない。

9つの「死の恐怖」を因子分析した結果、3因子が抽出され、死を迎えるプロセスで味わうであろう恐怖や不安と、人生が途絶えてしまう恐怖と、死や死後の世界が未知であるという恐怖と解釈された。そして、これらは死を迎える前の段階から、死の瞬間、死後と時間経過と一致してとらえられていた。鹿村¹⁾の研究は、死のイメージではあるが、カテゴリーとして「恐怖などの情緒面」「存在がなくなるな

どの社会面」「あの世の存在などの宗教面」にわかれることを述べている。今回導き出された3因子も、情緒面・社会面・宗教面ととらえることもでき、先行研究を支持する結果が得られた。

因子得点の平均値の比較では、第3因子に有意差があった。放射線技術科学専攻の学生は、「死や死後の世界が未知である恐怖」が小さいことがわかる。ここでも、放射線技術科学専攻学生の現実的な面がみてとれる。入学間もない1年生であっても、専攻による特徴をそなえていた。

調査の結果わかった、学生の「死の恐怖」に対するとらえ方を参考に授業を考えていきたい。「死の恐怖」について経時的な検討や、情緒面・社会面・宗教面からの検討を学生にさせることが、患者の理解の助けとなる可能性が示唆された。この時、とらえ方が専攻によって特徴があることは、さまざまな考え方があることを知る上で、学生にとってはむしろ望ましいかも知れない。

ま と め

死への恐怖について、看護学専攻と放射線技術科学専攻の1年生に調査し因子分析を行ったところ3因子が抽出された。第1因子は「死を迎える直前の過程に対する恐怖」、第2因子は「人生が途絶えることの恐怖」、第3因子は「死や死後の世界が未知である恐怖」と解釈した。この3因子は、時間軸上に並んでおり、各々情緒面・社会面・宗教面と関連した恐怖とも考えられた。また、ほとんどの項目において看護学専攻の学生の方が、より強く死の恐怖をとらえていた。

文 献

- 1) 鹿村真理子：看護学生の死のイメージと「あの世」観。第36回日本看護学会論文集 —看護教育—, 99-101, 2005。
- 2) 坊垣友美, 杉山智春：学習意欲を引き出す授業研究「死の模擬体験」の授業効果—死のイメージ形成と感性のゆらぎの観点から(後編)。看護教員と実習指導者, 2(5), 71-79, 2006。
- 3) 原田真澄, 堀容子, 高須美香, 東野督子, 安藤詳子：看護学生の死に対する態度に関連する要因 —死のイメージ, 性格, 死の経験との関連から—。日本看護医療学会雑誌, 7(2), 17-26, 2005。
- 4) 大和田知佐, 細井あずみ, 絹谷政江：大学生の死のイメージに関する意識調査について。死の臨床, 28(2), 287, 2005。
- 5) 落合清子, 長井美佐子：看護学生の「死のイメージ」の変化 —読書による死生観確立への影響について—。聖隷クリストファー大学看護短期大学部紀要, 27, 7-13, 2005。
- 6) 茶園美香, 岩瀬恵美, 飯塚哲子：終末期看護に関する学内演習および臨床実習の意義について—学生の「死のイメージの変化」による検討。第24回日本看護科学学会学術集会講演集, 446, 2004。
- 7) 齋藤英子, 林かおり, 藤野文代：大学生の死のイメージに関する研究 —TEG・Self-Esteem・身近な人の死の経験による分析—。群馬保健学紀要, 23, 49-53, 2003。
- 8) 齋藤英子, 佐藤愛美, 藤野文代：大学生の死のイメージに関する研究 —TEG・Self-Esteemによる分析—。第17回日本がん看護学会学術集会講演集, 98, 2003。
- 9) 一色康子, 河野政子：看護学生と他分野学生の死のイメージに関する調査研究 —調査項目の所属間の比較による検討—。看護学統合研究, 2(1), 57-61, 2000。

- 10) 岡田まり, 片岡智子, 吉岡多美子, 大西和子, 樋廻博重, 吉岡一実: 看護学生の死のイメージに関する研究. 三重看護学雑誌, 3(1), 53-59, 2000.
- 11) 深野佳和: ターミナルケアと人間関係. 岡堂哲雄編, ナースのための心理学 4 人間関係論入門, 初版, 金子書房, 東京, 115-127, 2000.
- 12) アルフォンス・デーケン: 死への準備教育第3巻 —死を考える—. メヂカルフレンド社, 東京, 1986.

(平成18年12月4日受理)

Analysis about Fear of Death
— Comparison between Nursing Students and Radiological Students —

Keiko SEKIDO

(Accepted Dec. 4, 2006)

Key words : fear of death, nursing students, radiological students

Correspondence to : Keiko SEKIDO

Major in Nursing, School of Health Sciences

The University of Tokushima

Tokushima, 770-8509, Japan

E-Mail: sekido@medsci.tokushima-u.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.16, No.2, 2006 343-346)